

【報告】

## 野田市郷土博物館の五感にうったえる特別展 “親子で楽しむ文化財展”

A Special Exhibition Experiencing Five Senses in the Noda City  
Museum, “Enjoying Cultural Properties with Family”

金山喜昭\*  
Yoshiaki KANAYAMA

野田市郷土博物館では、平成13年(2001)に特別展「親子で楽しむ文化財展」を開催した。その趣旨は、平成14年4月から開始する公立の小中学校の週休2日制や「総合的な学習の時間」の導入を踏まえて、博物館としても子どもたちの学習を支援することである。

これまでの特別展のなかで子どもを対象にしたものは、平成8年の特別展「よみがえる山中直治童謡の世界」があるが、それは高齢者などの一般市民も対象にしたことから、展示会の構成は子どもに少し難解なところがあった。それに比べて、この特別展は、小学生を対象とした内容構成により、子どもたちに博物館を親しんでもらうことを意図した。また、学校の教師にも「総合的な学習の時間」の参考となるようにした。

### 1. 特別展の内容

特別展の題材は地域の文化財である。アプローチは、これまでのように展示品を見るだけでなく、展示品に触れたり、音を聴いたり、製作体験するなど、五感(触覚・味覚・嗅覚・聴覚・視覚)に触れて、楽しみながら学習ができるものにした。

#### (1) 展示活動

展示品は、閻魔大王像(市内普門寺から借用)、三

ツ堀どろ祭りの神輿、醤油醸造之絵馬、勝文斎製作の押絵行燈、土器、埴輪、高島野十郎の絵画、板碑、四神像、紙巧琴、江戸時代の小判、勾玉、民具など約110点と、子どもが描いた文化財の写生画45点である(写真1)。



写真1 展示会場の様子 閻魔大王の展示

展示の解説文は、子どもにわかりやすい文章を作成した。これまでの博物館の解説文は、中学校1~2年生が理解できる教育水準とされてきたが、ここでは小学生を対象にしていることから、小学生にわかる教育水準に設定することにした。その一例として、小判と閻魔の解説文を次に示す。なお、漢字にはすべてルビをつける。

\*野田市郷土博物館館長補佐

平成14年2月20日受理

## 小判

「小判は、江戸時代につかわれたお金です。当時の貨幣は、金・銀・銭（銅）の3種類でした。これは、元文元年（1736）～文政元年（1818）につかわれた1両金貨です。金貨といっても、すべて金ではなく、銀が35パーセントは入っています。おもてには「壹両」ときざまれています。むかしは1を「壹」とかいていました。1両は、今のお金でいうと、4～5万円ぐらいの値うちになります。これらは、平成9年4月に福田第二小学校の校庭の工事現場からみつかったものです。市外からはこんできた土のなかにまじって入っていたようです。全部で8枚みつけましたが、ブルドーザーなどにふまれたせいでしょうか、小判のおもてにはキズがあったり、おれまがつたものがあります。」

それに男の子による、「一両っていくらくらいかな？」という言葉を入する（写真2）。

## 小判 こばん

小判は、江戸時代につかわれたお金です。当時の貨幣は、金・銀・銭（銅）の3種類でした。これは、元文元年（1736）～文政元年（1818）につかわれた1両金貨です。金貨といっても、すべて金ではなく、銀が35パーセントは入っています。おもてには「壹両」ときざまれています。むかしは1を「壹」とかいていました。1両は、今のお金でいうと、4～5万円ぐらいの値うちになります。これらは、福田第二小学校の校庭の工事現場からみつかったものです。市外からはこんできた土のなかにまじっていたようです。全部で8枚みつけましたが、ブルドーザーなどにふまれたせいでしょうか、小判のおもてにはキズがあ



写真2 展示解説文

## 閻魔

「閻魔様とはだれでしょうか。人間は死ぬと、生きていたときによいことをした人は天国に、悪いことをしたら地獄にいき罪を裁かれるといわれています。閻魔様は地獄の主とされ、悪いことをした人の罪を裁きます。市内下三ヶ尾の普門寺には閻魔様の像があります。大きな鼻に目を大きくみひらき、赤い顔

## 閻魔 えんま

人間は死ぬと、生きていたときによいことをした人は極楽浄土に、悪いことをしたら地獄にいき罪を裁かれるといわれています。閻魔様は地獄の主とされ、悪いことをした人の罪を裁きます。市内下三ヶ尾の普門寺には閻魔様の像があります。大きな鼻に目を大きくみひらき、赤い顔をしたようすは、まさに地獄の主といったかんじです。しかし、閻魔様はやさしいところもあります。普門寺のものは、むかしから赤ちゃんがぶじに生まれたり、子どもがすこやかに育つようにねがいをこめられてきました。お堂のわきには、人びとのねがいをかいたお札がたくさんおさめられています。



写真3 展示解説文

をしたようすは、まさに地獄の主といったかんじです。しかし、閻魔様はやさしいところもあります。普門寺のものは、むかしから赤ちゃんがぶじに生まれ、子どもがすこやかに育つようにねがいがこめられてきました。お堂のわきには、人びとのねがいをかいたお札がたくさんおさめられています。」

それに女の子による、「えんまさまって、こわいからお、おこっているの？」という言葉を入する（写真3）。

解説文は、各展示コーナーに設置した。展示コーナーは、閻魔・紙巧琴・看板・画家・掛軸・土器・勾玉・埴輪・板碑・四神・押絵・行灯・農具・御輿・

表1 年齢別の入館者数

1～9歳	107人 (21%)
10歳代	70人 (14%)
20歳代	22人 (4%)
30歳代	52人 (10%)
40歳代	50人 (9%)
50歳代	76人 (15%)
60歳代	73人 (14%)
70歳代	41人 (8%)
80歳代	3人 (—)
無記入	15人 (3%)

表2 職業別入館者数

小学生	151人 (39%)
中学生	10人 (3%)
高校生	4人 (—)
大学生	11人 (3%)
教師	15人 (3%)
会社員	72人 (14%)
自営業	21人 (3%)
公務員	12人 (3%)
主婦	105人 (21%)
その他	94人 (18%)
無記入	14人 (3%)

絵馬・小判の16コーナーである。また、紙巧琴はその音色が聴けるように事前に録音しておいた音楽をテープレコーダーから流す。

会期中は会場において、アンケート調査を行った。10月13日～11月18日の期間で休日を除いた開館日日の入場者数は3,892人であった。そのうちアンケートの回収枚数は509枚（回収率13%）。アンケートの数字は実数ではないが、傾向を知ることができる。来館者の年齢構成は、表1・2の通り、低年齢層が顕著である。これは、当初に期待したように子どもが多く来館したことを物語る。年齢別（表1）や職業別（表2）の来館者数を見ればわかるように小学生が最も多い。年齢層で30代とその前後の年齢層の人たちのなかには保護者も含まれる。

そこで、解説文の理解度を調べたところ、251人

表3 展示解説文の理解度（無回答87人を除く）

	とてもむずかしい	少しむずかしい	わかる	よくわかる	とてもよくわかる	計
6才以下	2	3	2	1		8
小学1～3年	2	12	9	7	8	38
4年		8	1	5	2	17
5年		3	3	2	5	13
6年		1	8	3	6	18
中学1～3年		1	2		1	4
高校1～3年			1	2		3
大学生			2	1		3
20才代			4	3	1	8
30才代		3	14	8	5	30
40才代		2	13	15	3	33
50才代		1	14	13	3	31
60才代			6	17	3	26
70才代			7	6	1	14
それ以上				1		1
計	4	34	86	84	39	247

の回答が得られた（表3）。理解できた人が全体の84%というように高率である。その内訳を見ると、小学生の低学年以下は理解できない子どもがいるが、5年生以上では大半が理解できたことがわかる。大人の方も小学生高学年の傾向に類似している。このことからいえることは、解説文は来館者の大部分が理解できたこと、また小学生高学年が理解できると同時に、大人にも理解できたことである。解説文に漫画で男の子と女の子の口から吹き出しで質問のセリフを入れたことは解説文の理解を助けたようであ



写真4 学芸員による展示解説 埴輪をケースから出して子どもたちに触れさせる

る。

会期中は学芸員による展示解説会を行った（写真4）。子どもたちを対象にした解説をしながら、保護者のことも留意しながら話をする。動線に従い随時展示ケースから展示品を取り出して子どもたちに触れさせる。なかでも小判は人気があった。幼児から高齢者まで関心を集めた。子どもたちには、「（テレビアニメの）ピカチュウに出てくるニュースの額についている本物の小判だよ」というと、子どものなかには「猫に小判でしょ」という。すると、こちらはその諺の意味を解説する。子どもは納得する。小判を持った大人の感想は、「思っていたより重い」とか「薄い」などというものであった。

会場にはハンズオンのコーナーを設置した。「昔の道具にさわってみよう」というタイトルをつけて、唐箕・臼と杵・石臼を使用できるようにした。なかでも石臼には最も人気が集まった。炒った大豆を挽くときな粉ができる。すると香ばしい香りがする。なかには舐めて味わう子もいる。子どもたちの多くはきな粉の原料が大豆であることを知らなかった。しかし、自分で作ることで納得する。杵も、持つと予想外の重さに驚く。一見すると、子どもたちは、展示品を見ることよりもハンズオンの方に興味をもっていったようである。実際、アンケート調査による来館者の感想には、「きなこをきいてみて重かった。こういう経験はあまりできないなあと思った」（中学生）、「ハンズオンがあるとないでは随分違いますね。今までの展示よりずっと面白いです。何よりも温もりが伝わって良いと思います」（大学生）、「子供が昔

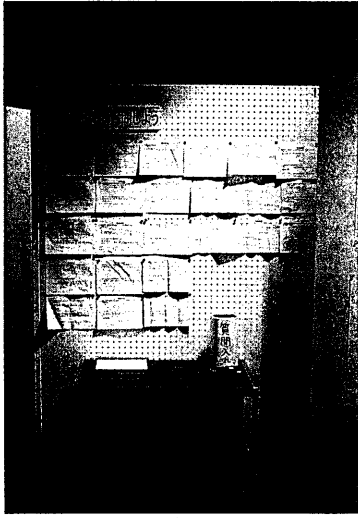


写真5 質問コーナー

の道具に触れるのは良いことだと思います」(会社員) などがある。

また、会場には質問コーナーを設置した。「学芸員に質問しよう」というタイトルをつけて、子どもが質問用紙に書いた質問に学芸員が解答を書いて掲示する(写真5)。幼児から中学生までの子どもがいろいろな質問を寄せてくれた。質問した子どもは、後日、自分の質問の解答を見るために来館する。その一例を示すと、「なんでこぼんはうすいの？」(4才)、「なんでえんまさまはしゃくをもっているの？」(6才)、「埴輪は何のために作ったんですか？」(小学4年生)、「なんで昔の看板は右書きなんですか？また、どうして左書きになったんですか？」(小学6年生)、「昔の鉄剣はどうしてボロボロになっているのですか？」(小学6年生) というものであった。



写真6 体験講座の勾玉づくり

## (2)体験講座

体験講座は、勾玉づくりと火おこしを行った。勾玉づくりは、会期中の毎週日曜日と隔週土曜日の7回行い、参加者は延べ216人。火おこしは日曜日の3回行った。勾玉づくりは2時間、火おこしは1時間程度である。いずれも学芸員が指導する。夏休みの博物館実習生がボランティアとして協力してくれた。

勾玉づくり(写真6)は、近年各地の博物館の講座で行っている。ミュージアムショップには勾玉づくりのセットを販売している。材料となる石の大きさにもよるが600円~900円ほどする。なるべく手軽にできるように、石は学校教材のカタログをみて取り寄せることにした。大きな原石をノコギリで適当なサイズに切る。さらにドリルで紐を通す穴をあける。紙ヤスリを適当なサイズにきる。目の荒いものから細かい磨き用のものまで3種類揃えて、それぞれ適当なサイズに切っておく。鉄製のヤスリも揃える。紐は数色を用意する。鉄製のヤスリ別にすれば、一人あたりの材料費は100円程度で採算がとれる。

参加者は申し込み制にした。定員を30人としたが、実際にはそれを超える場合があり、多いときには40名を超えた。年齢制限はなし。小学生のグループや親子の参加が顕著であった。最年少は3才、最高齢は70才代。

講座では、最初に学芸員が勾玉の解説をする。それから作り方を教える。要点を話す程度にして、まずは作り始めてもらいながら、実物を各自に見せながら触れてさせて、実物をよく見て真似るように助言する。器用な人もいれば、そうでない人もいる。出来ばえは様々である。なかには驚くほど出来ばえのよいものがある。なによりも感心したのは、子どもたちが皆一生懸命にやったことである。短くても1時間、長い場合には1時間半以上かけて、一身腐乱になって勾玉づくりをしていた。完成して穴に紐を通して首にかけた時の笑顔が嬉しそうであった。子どもは好きなことは飽きずにやる。小学校の授業は45分単位であるが、熱中すれば、時間を忘れて励むことがわかった。あるいは、一緒にきた両親も熱心になっていた。父親の作った勾玉を見た子どもが、「お父さんののはすごい」といって父親を見直していたのも印象的であった。リピーターも数人いた。なかには、これで2つ目になったという子どももいた。

アンケートのなかには、勾玉づくりの感想があるので、その一例を紹介する。「勾玉づくりは大変だったけどおもしろかったです」(小学5年生)、「勾玉作りはむずかしかったけど楽しかったです」(小学3年生)、「楽しく体験できた。子供が作る楽しさを味わえた。説明してくださる方の人柄が大変優しくわかりやすい指導で雰囲気がよかった」(女性・教員)、「親子でいっしょに何かを作る作業はあまりないのでとても良い体験が出来たと思います。そして記念にもなり、形にも心の中にも残る思い出をつくる事ができました」(主婦)、「勾玉づくりに3才の娘と参加しました。実際に作ってみると1600年前のとても遠い存在だったものが、ぐっと近づいて親しみが湧いてきました。当時の人はどのような思いで勾玉を作ったのだろうかと想像しながら楽しい一時を味わうことができました。娘も手作りの勾玉ペンダントを喜んでしました。博物館を身近に感じる事ができて、とてもいいことだと思います」(主婦)といものである。



写真7 火おこし

火おこし体験(写真7)は、最初に学芸員が火の歴史的な意味づけなどを解説してから、火おこしの実演をする。あとはグループごとに子どもたちが火おこしをする。火おこし体験は平成8年以来、小学校の団体利用で行っているが、子どもたちには大変人気がある。団体利用のときは、学校単位でくるので、教師が計画しなければ、いくらやりたいと思う子どもでもその機会がないことになる。ところが、特別展の際には、個人参加であるから、子どもの意志で参加することができる。また年齢制限も加えてないことから、誰でもできる。これまでは、学校単位の利用者は6年生に限定されていたが、今回は幼



写真8 絵本図録

児でもやれることがわかった。

### (3)絵本図録

図録は子ども向けの絵本形式のものを作成した(写真8)。絵本形式の特別展図録は類例を知らない。特別展は会期が限られているが、図録は紙上の特別展にすることで、終了後も楽しむことができる。設定は、親子4人が休日に特別展を見学する。構成は、各展示コーナーの展示品を見ながら親子の会話がはずむ。次に学芸員の仕事の様子を紹介して、学芸員という職業の理解をはかり、最後に親子が次回の特別展を期待して博物館をあとにする。

## 2. 特別展の成果と課題

今回の特別展の成果や課題は次の通りである。

- 1) 子どもたちに解説文がよく理解された。これまでの博物館の解説文は中学生の教育水準に設定しているが、これからは小学生に理解できるものにする必要がある。なぜならば、中学生は博物館の解説文や図録を見ても専門用語が多くて難解で理解できないのが現状である。職場体験の中学生にしばしばテストすると、各地の博物館で出版している図録を理解することができない。例えば、中世や近世の展示解説や特別展図録を見ても私でさえ理解できないことがしばしばある。つまり、現状の博物館の解説文などは、一般の成人の来館者でも理解できないのが実情といえるだろう。今回の解説文は、成人にも理解できたが、これは小学生が理解できれば成人も理解しやすいことを示している。小学生の水準を基準にして、必要があればさらに高度な水準の解説文を用意する。まずは、これ

までの中学生の水準を改めて小学生高学年向けに水準を改めることを問題提起する。

- 2) これからは従来の展示のみのスタイルから、五感に訴えるスタイルに移行することが必要である。子どもは、「見る」だけでは学習効果はあまり期待することができない。今回は、見る・聴く・触れる・つくる・使うなどを実施した。石臼で大豆を挽くときの粉の香りがする、つまり臭いを嗅ぐこともできた。子どもたちや親の反応は先述した通りである。
- 3) 体験講座の内容にもよるだろうが、参加する子どもの年齢制限をしない方が子どもの自由な活動を促進する。これまでの子どもの体験講座は、参加者を「小学生3年生以上」などのような年齢制限をする場合が多かったが、子どもの安全性などを配慮して幼児でも参加できるように門戸を開放する。「どうせできないだろう」という主催者側の先入観を捨てることである。今回は幼稚園児でも勾玉づくりや火おこし体験を熱心にやっていた。子どもの可能性を引き出すのが博物館の学習支援のポイントである。
- 4) 学芸員と子どもたちの双方向の関係をつくることが子どもたちの学習にとって不可欠の要素である。つまり子どもたちとコミュニケーションをはかることである。子どもたちの視線で対話することである。従来のように展示を「見せる」だけでは、学芸員は子どもたちとのコミュニケーションをはかることはできない。今回は、展示解説・「学芸員に質問しよう」・勾玉づくりなどを通じて学芸員と子どもたちとのコミュニケーションを極力はかったところ、アンケートには「丁寧に説明していただき子どもも喜んでおりました。ありがとうございました」(主婦)などの意見がみられた。
- 5) 学校の教員の対応に問題が残る。今回の特別展は、教員にも博物館の理解をはかることを眼目のひとつにしていた。「総合的な学習の時間」の参考になるように企画したものである。あらかじめ博物館としては、教員に周知するために、学校校長会や教務主任会議などの会議の際に通知や説明を行い、特別展のチラシを市内すべての小中学校のクラスごとに配布した。ところが、

特別展を利用した学校は、一つの小学校の1学年だけであった。教員個人の来館者も表2に示すように15人であるが、野田市外の教員も含まれていることから、市内の教員は10人程度であろう。つまり、博物館側から子どもたちの学習支援策を提供しても、現状の学校教員は無関心だといえる。これまで山中直治の童謡の復活活動を博物館や住民たちと取り組んできたが、コンサートなどにはその学校の担当教員や教頭、教務主任は参加するものの、それ以外の教員はほとんど無関心であったことに符号する。今後いくら地域社会が学校を支援することが必要だといっても、教員が地域社会の活動に無関心ならば、子どもたちの教育は改善しない。子どもが教員を選ぶことができれば、教員自身も変わるかもしれない。教員の現状については、もう少し時間をかけて様子を見ることも一案であるが、一方では教員が変わることを待つよりも、まず子どもの立場にたち、子どもが利用しやすい夏休みや春休みに事業を展開することもひとつの方向性である。